

仏教がみちびく、あらたな人生

# 同朋

月刊 どうぼう

4  
2013

300円

## 次世代へ「継ぐ」

大切なのは、若い人たちと  
「一緒に生きる」ということ

対談 尾木直樹さん × 脇淵徹映さん

京都まちめぐり  
二条城界限

親鸞聖人の軌跡  
延仁寺

暮らしのなかの仏教語  
唯我独尊

旅する郷土料理  
鴨川の太巻き祭りずし

くらしデザイン部  
はじめてのチョークアート



どこまでも自由に  
エンターテインメントに  
徹する。

インタビュー

春風亭昇太さん



特集

# 次世代に

# 継ぐ

母が私にこの歌を 教えてくれた 昔の日 母は涙を浮かべていた  
今は私がこの歌を 子供に教えるときとなり  
教える私の目から涙があふれ落ちる

〔母が教え給いし歌〕ドヴォルザーク作曲／堀内敬三訳詞

親や先輩から受け継いだ大切な伝統や信念を  
子や孫、後輩たちに引き継ぎたい…。

しかし、その思いがなかなか叶えられないのが現代です。

大切なものを、未来の世代に手渡すにはどうすればいいのか。

ご一緒に考えてみませんか。



継ぐ

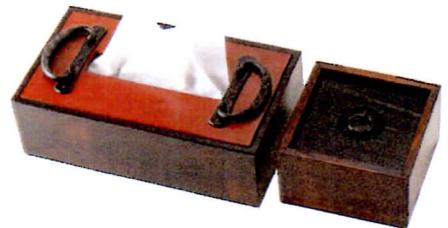
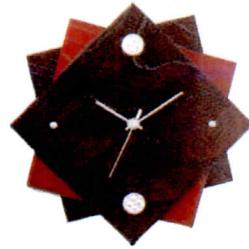
つゞく〔継ぐ・注ぐ・接ぐ〕もの  
のつづきを絶やさぬようにする。

- ① 絶えないようにあとを受け継ぐ。
- ② 保ちつづける。
- ③ つたえる。うけつたえる。
- ④ 連ねる。
- ⑤ 後から後から加える。

〔広辞苑〕第6版より



伝統の技術の粋を集めた、日吉屋の野点用和傘。



伝統の技を手頃な価格で提供する「くらしな」。小物入れや壁掛け時計、ティッシュボックスやパスタボックスなども。

「津波で海水をかぶると引き出しが開かなくなるんです。中にも泥が入っちゃって…。200本くらい補修してまわったんじゃないかな」

長く筆筒を愛用してくれている人への恩返し。そして、何よりこの伝統の技は、継ぐ「人」そのものが財産だ。神戸の大手デパートの家具バイヤーが「技術を途切れさせてはいけない」と、特設売場を設けてくれるなど、温かい支援もあった。

組合ではいま、次世代の後継者育成に積極的に取り組んでいる。伝

## 伝統の和傘に革新の灯りをともす

「日吉屋」五代目当主 西堀耕太郎さん

現在、京都市内で和傘を製作しているのは、創業150年の「日吉屋」一軒のみ。当主の西堀耕太郎さん（38歳）は、和歌山で公務員をしていた当時、交際していた結婚相手の実家が日吉屋だったことから、伝統の世界の後継者となった。

「和傘を見るたびに綺麗だなと思っていました。でも聞けば後継者はいない、職人も身内だけ。売上は

統一芸士の資格受験のために若者を教育し、製作者の増員も行っている。同時に岩手大学の教員と共同で、デザイン性の高い筆筒の製作を行うなど、新しい試みにも積極的だ。

「身近な小物を手軽な値段でと、くらしな」という木工製品のシリーズを作りました。まずは知って、触れてもらって、そこから筆筒の方にも目を向けてもらおうとっかかりになれば…」そう話す三品さんの言葉から、伝統工芸品が陥りがちな「負の連鎖」脱却への光を感じた。

年商100万円で廃業寸前でした」

結婚後も和歌山で暮らしていた西堀さんは「何とかしたい」と立ち上がった。

「伝統とは何かと考えたときに、色々な革新の積み重ねであると気づいたんです。千年前からずっと変化しながら来ていたのに、今の和傘を見ると、江戸時代中期に完成されてから300年くらい止まってい



る。なんとか現代生活に合った革新的な変化がないと生き残れない」

あるとき、傘を外に干して「照明」に使えないか考えた。骨組みが綺麗で光が透ける、畳めるという「傘の当たり前」は、照明には新しい機能だ。そしてデザイナーらと試行錯誤の末、完成したのが、「古都里」シリーズだった。

「傘が開いても誰も驚きませんが、ランプが開くとみんな驚いてくれるんです」

あえてデザインで勝負。グッドデザイン賞も受賞し、欧米各国のデザイン博やインテリア見本市などにも出品して、高い評価を受けた。

いま、西堀さんは若い職人さんたちに、和傘製作の伝統技術を積極的に教えている。

「僕の場合は、自分で覚えるしかなかった。最初の頃は週末だけ京都へ来て、解らないところを聞いて、製作過程をビデオに録画して。材料をもらって和歌山へ帰り、仕事が終わった後にビデオを見ながら試行錯誤、また京都へ…というのを何年か繰り返ししました」

技術は基本的に江戸時代から変わっていない。だから、それを体で覚え、理詰めで次に伝え、発展させていく。工房で働く若い4人の職人さんたちの平均年齢は25歳。基本的

に職人だがクリエイターでもあり、商品開発の意見も聞く。

「和傘の世界は完全分業制で、竹の骨屋さん、ろくろ屋さん、和紙屋さん、それぞれが職人なんです。十何年一緒にやっていますから、サイズを言えばそれぞれで部品を仕上げてください、それらがピタッと寸分の狂いも無く合う。和紙も手漉きですし、全部職人さんの勘ですよ。そういう職人技に支えられているのが、うちの和傘なんですよ」

自分たちの和傘に周辺も含めた「職人の技」を残したいと、西堀さんは照明の新シリーズ「MOTTO」も製作するなど、今も新しいチャレンジを続けている。また傘の「軽くて畳めて持ち運べる」利点を活かして、畳めて持ち運べる「茶室」も作った。「もちろん実用という面もありますけど、外国で非常に理解されやすい、アピールという面もあります。茶道はすでに広く認知されている。ここに和傘の良さを茶室という形で融合させると、新たな発見があって喜ばれるんです。ラテン語系のCASA（カーサ）には『家』という意味があるし、和傘の歴史はずっと革新の連続だったから、百年後はひょっとした



和傘は繊細な職人技の集大成。(撮影：津久井珠美)

ら「傘」と言ったら『家』という意味になっているかも知れませんがね(笑)」  
 ……そう笑う西堀さんだが、一方で、伝統ある和傘もしっかりと引き継ぎ、修理や張り替えという仕事も当然行っている。好評な新商品が伝統を支えている側面もあるのだ。和傘を守りつつ、次は和傘をどう変化させてくれるのか、楽しみだ。

伝統とは何か。そして、それを守り次世代へ伝え継ぐということには、柔軟な発想と、革新を恐れない大胆さとセットである。そう考えさせられた。



和傘の技を活かした「古都里」シリーズ。(撮影：津久井珠美)